

高校国語科必修科目「言語文化」における 博物館を活用した近世文学の学習 —「東海道中膝栗毛」の舞台を巡るガイドブックを作成しよう—

ドルトン東京学園中部・高等部 小関瑠奈

1. 実施学年及び教科・領域

高等部第一学年 国語「言語文化」

2. 学習のねらいと博物館活用との関連

(1) 単元名

近世の文学作品に触れる —「東海道中膝栗毛」の舞台を巡るガイドブックを作成しよう—

(2) ねらい

①学習指導要領との関連

『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）』（以下、「高等学校学習指導要領」）第 1 章総則第 3 款 1 (6)、「学校図書館、地域の公共施設の利活用」においては、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。」（下線は報告者が加筆した）と、博物館をはじめ、学校外の公共的施設や資料を活用した活動が求められている。

地理歴史、公民、理科、芸術などの教科は学習指導要領解説において博物館等の施設の活用について言及されている一方で、国語の学習指導要領解説には、博物館等の施設や資料に触れる記述は見られない。しかし国語が、広く様々な時代や地域、テーマの文章を扱い、伝統や文化に親しむ性格を持つ教科であることから、国語の学習においても博物館等の資料の活用は有効であると考えられる。

特に高校 1 年生の必修科目である「言語文化」は、上代から近現代に受け継がれてきた言語文化への理解を深めることに主眼を置き、言語や、言語による芸術・芸能などを通じて他者との関わりの中で伝え合う力を高める科目であることから、様々な形で博学連携の可能性を持つ科目であると考えられる。

(3) 単元の目標

- ・作品の時代背景を踏まえつつ、担当箇所の内容を理解し、的確にまとめることができる。
- ・情報源を工夫しながら、多面的に情報を収集することができる。
- ・作品と現代とのつながりを意識しながら、担当箇所の魅力を効果的に伝えることができる。

① 博物館との関連

① 活用方法：非来館型活用

② 活用資料 国立歴史民俗博物館（以下、「歴博」とする）の資料群には★を付した。

★国立歴史民俗博物館 第三展示室

事前に資料の写真を撮影し、利用した。

- ・解説パネル「旅への誘い」「道中」「街道絵図」「東海道のいま」等
- ・東海道中膝栗毛
- ・東海道名所図会

- ・ 東海道写真五十三勝景
- ・ 道中日記帳、道中日記
- ・ 道標
- ・ 旅の小道具

紙縫で作った瓢箪、折り畳み蠟燭立て、小田原提灯、携帯用枕、道中差、発火具、火打石、印籠、財布、矢立 など

- ・ 棕本村旅籠 角屋

★国立歴史民俗博物館公式ホームページ内「歴博画像データベース」

下記のデータベース内の資料については、歴博博物館事業課資料係の皆様にご協力いただき、資料利用許可の申請を行い、印刷し使用した。

- ・【資料番号 H-110-1-129】秋岡武次郎古地図コレクションのうち 大日本道中細見記

CANON の運営する無料印刷素材サイト「Creative Park」

- ・ 東海道五十三次¹

国立国会図書館デジタルコレクション

- ・ 東海道中膝栗毛 発端

(4) 指導観

高等学校の必修科目である「言語文化」では、様々な文学的作品などを通じて、過去から現在までの繋がりを意識し、自分自身や社会の今後に活かそうとする姿勢を育成することが求められている。しかしながら、学習指導要領が新課程に移行し、必修科目が「国語総合」から「現代の国語」と「言語文化」となった 2022 年度以降も、「言語文化」においては、従来の古典の学習のように、文語文法を身に付けて作品を読解することに重きを置いた授業が展開されていることも少なくないのが現実であろう。

今回教材として取り上げた十返舎一九の「東海道中膝栗毛」は、江戸時代後期に大流行した滑稽本である。主人公である弥次郎兵衛と喜多八²の二人が伊勢詣でを思い立ち、様々な失敗や騒動を巻き起こしながら江戸から東海道を旅する様子を狂言や小咄も交えながら描いたもので、当時の人々から長きにわたって絶大な人気を得た作品である。本実践を行うにあたり生徒を対象に行った事前アンケートでは、「江戸時代の文学作品で知っているもの」として約 20%（8 名）の生徒が「東海道中膝栗毛」を挙げていた。しかし、歴史の学習の中で作者・作品名を学んだのみで、物語の内容については知らないという生徒がほとんどであった。「東海道中膝栗毛」は、高校における古典学習の定番教材である源氏物語や方丈記などと比較しても、現代の語彙に近いため内容を理解しやすく、つまずきを感じる生徒が多い用言や助動詞の活用や古典単語の意味を知らなくてもある程度の内容を理解することができる。そのため、高校の古典の学習のはじめに取り組む作品として適しているのではないかと考えた。また近世の文学は「民衆の文学」であるとも言われる。「唯だの親仁³」二人が主人公である本作品は、近世に生きた人々の生活や文化を学ぶのに適しており、「伝統や文化に親しみを持つ」という言語文化の科目の目標の達成に相応しいものであろう。したがって本実践は「東海道中膝栗毛」の高等学校における文学作品としての教材化の

¹ 使用したのは、歌川広重が天保 4～5（1833～1833）年頃に手掛けたとされる、保永堂から出版された保永堂版である。

² 「北八」と表記されている箇所もある。

³ 『東海道中膝栗毛 発端』（1814）より。

試みでもある。

この単元の学習では、生徒ごとに担当場면을割り当て、自分の担当部分について内容を把握したり関連する内容について調べたりし、最終的には「東海道中膝栗毛」の舞台を巡るツアーガイドブックの作成を目指す。生徒に担当場면을割り振ることで、学習課題を自分事とし、学習に意欲的に取り組んでもらいたいという意図がある。学習の導入や近世という作品の時代背景を学習する時間には、歴博の資料をはじめとした様々な資料を活用することで、街道や交通設備が整備され、庶民でも長距離の移動が可能になったことや、道中案内や絵図などを実際に見ることを通して、それらが当時の人々の旅への憧れを高めていたことに気付かせたい。特に本実践では、歌川広重の「東海道五十三次」を用いて主人公二人が歩いた東海道の位置関係を確認しながら、当時の各宿場の雰囲気や地理を視覚的にも捉えられるようにした。

また、学習をはじめるとあたり、生徒たちの江戸時代のイメージや、博物館等の施設⁴を訪れた経験について、アンケート調査を行った。アンケート調査の概要は下記のとおりである。

【事前アンケート調査の概要】

- ・対象者：高等部1年学習グループ3・4に在籍する生徒47名
- ・回答率：87%（41名が回答）
- ・回答方法：formsによるオンラインでの回答

総回答者数が少ないため、このアンケート調査の結果を一般的な高校生の実態と捉えることはできないが、「最近1年間で博物館等の施設をどのくらい訪れましたか？」という質問に対して、41%（17名）の生徒が「まったく訪れなかった」と回答していることは注目に値するだろう。「これまでに博物館等の施設を訪れたことはない」と答えた生徒はいなかったが、「最後に博物館等の施設を訪れたのは小学生時代」という生徒も25%（10名）いることが分かった。さらに「千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（歴博）を知っていますか？」という質問に対しては、88%（36名）が「知らないし行ったこともない」と回答している。本校は、歴博から公共交通機関を利用して片道2時間半の距離があるとはいえ隣県であり、千葉県から通学している生徒もいる。それにも関わらず、歴博の存在が高校生には十分に知られていないということが明らかになった。

その一方で、「調べ学習などで、博物館等施設が提供する、オンライン上で資料を探したり、見たりすることができるサービスを利用したことがありますか？」という質問に対しては、40%（16名）の生徒が「サービスの存在を知っている」と回答⁵しており、各博物館が行っているデータベースの活用など、非来館での博物館のサービスは、高校生にもある程度認知されていることが把握できた。

本実践において、各生徒が担当箇所の内容を理解したり、過去から現在への変遷について調べ、考察を重ねたりする中で、様々な文献や資料を自ら探し求め、活用しようとする姿勢が見られたり、これまで博物館から足が遠のいていた生徒たちの博物館に対する関心を高めることができれば、本実践における博学連携には意義があったといえることができるだろう。

⁴ 博物館法で定められた登録博物館のほか、博物館相当施設や博物館類似施設も含む。

⁵ 「利用したことがある」と答えた生徒が15%（6名）、「サービスの存在は知っているが、利用したことはない」と答えた生徒が25%（10名）だった。

3. 単元の指導計画（12 時間扱い）

網掛け部分は博物館資料を活用した時間であり、「4. 実践の概要」にて詳細を述べる。

時間	○学習活動および内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
1	○単元の導入 ・学習の目的や計画の説明。 ・江戸時代について、各自が持っているイメージや知っていることを共有する。 ・「東海道中膝栗毛」の作品の概要と、作者である十返舎一九について知る。	☐ アサインメント ⁶ をもとに、見通しを持って生徒たちが学習に取り組めるよう、課題や評価基準を提示する。 ☐ 他者の意見を知ることで、新たな視点が得られるようにする。
2	○江戸時代の「旅」についての理解を深める ・江戸時代に旅が普及した理由を理解する。 ・当時の旅の装束や持ち物などについて知る。 ・当時の旅の様子が分かる資料が様々な形で現在に残されていることを理解する。 ・街道にはさまざまな名所や史跡、歌枕があり、旅の楽しみとなっていたことを理解する。 【課題】 ・「なぜ庶民も長距離の旅をする／できるようになったのか」を規定字数でまとめる。	☐ 参考資料やこれまでに学習した作品（松尾芭蕉「おくの細道」）などと関連付けながら、当時の人々にとって旅がどのような意味を持つものであったのかを考えさせる。 ■【知識・技能】 学習した内容について、提示した資料等から読み取れる事柄に触れながら、自分の言葉で的確にまとめることができている。
3 4	○物語の舞台を捉える ・歌川広重「東海道五十三次」の表題から宿場名を読み取る。 ・地図の各宿場の位置にシールを貼る。 ・地図や絵図から気付いたことや疑問点を書き出し、共有する。	☐ 適宜生徒たちの様子を見て周り、声がけを行う。 ☐ 手作業で地図を作成させることで、東海道の位置や距離感をイメージできるようにする。
5	○「日本橋」を読む ・歴史的仮名遣いの確認。 ・成果物のイメージを掴む。 ○ガイドブック作成のための担当者決め	☐ 旅立ちの場面を読み、物語の設定を理解させるとともに、成果物（ガイドブック）作成に向けての見通しを持たせる。

⁶ ドルトンプランにおいて、学習の内容（単元・テーマ）ごとに用意される、学びの目的や到達目標、学習の方法や手順、課題、評価方法などを示したもの。

6 7 8 9	○各担当場面を読む ・自分たちの担当場面について現代語訳し、関連する事柄について調べ、まとめる。 ○ガイドブックの作成	□必要に応じて生徒たちが自分で情報を探し出せるよう、参考資料等を用意する。 ■【知識・技能】 ・時代特有の表現に注意しながら、担当箇所の物語の概要が的確にまとめられている。 ・情報源を明確にしつつ、複数の資料を活用することができる。 ・ツアーガイドブックのページとして、必要な情報を盛り込むことができる。 ■【思考・判断・表現】 ・成果物の中で、作品と現代との繋がりに触れることができる。 ・担当箇所の魅力を、独自の視点を交えて効果的に示すことができる。 ・読み手を意識した構成や視覚的な資料の活用などの工夫ができる。
10 11	○成果発表 ・自分の担当場面について、成果物を提示しながら紹介する。	□他の場面の内容を知り、物語全体の内容を掴むことができるようにさせる。 □相互評価を行うことで、学習の振り返りに活かすことができるように意識させる。
12	○学習の振り返り ・担当箇所や旅そのものについて、江戸時代と現在を比較し、それに対する自分の考えを書く。	■【主体的に学習する態度】 ・自身の学びを客観的な視点で言語化することができる。 ・本アサインメントにおける学びの意味について、今後や教科での学びと関連付けながら考えを深めることができる。

4. 実践の概要

本報告における実践は、報告者の所属校であるドルトン東京学園⁷高等部1年生の2つの学習グループ（学習グループ3：20名、学習グループ4：27名）を対象に2024年6月から9月にかけて行った。ここでは、博物館資料を活用して行った1～4時限目、6～9限目について述べる。

本実践では底本として岩波文庫の麻生幾次校注『東海道中膝栗毛 上』『東海道中膝栗毛 下』（とにも

⁷ 東京都調布市入間町にある、2019年に開校した私立の完全併設型中高一貫。男女共学で、生徒は中等部・高等部合わせて約620名。アメリカの教育家ヘレン・パーカスト（1887-1973）が提唱した、「自由」と「協働」の2つの原理と「ハウス」「アサインメント」「ラボラトリー」を軸とする、「ドルトンプラン」に基づいた教育を行う。

1973)を用いたが、作品の時代背景や作風を尊重しつつ、現在において教育上不適切な内容であると思われる場面はあらかじめ除いて実践を行ったことを付記しておく。

【1時限目】単元の導入

単元開きにあたるこの時間はまず、アサインメントをもとに学習の目的や手順、課題、評価基準等を説明し、江戸時代について知っていることを共有したり、「東海道中膝栗毛」についての基本的な内容や作者である十返舎一九について知ることで、学習に対する意欲を高められるよう意識した。

① 江戸時代について知っていることやイメージを共有する

4・5人ずつのグループを作り、『江戸時代』と言えば……」に続く言葉を考えさせた。下に、あるグループの生徒たちが挙げたものを示す。

黒船、参勤交代、生類憐みの令、松尾芭蕉、坂本龍馬、鎖国、目安箱、享保の改革、松平定信、徳川家康、徳川家光、徳川綱吉、徳川慶喜、五人組、吉原、寛政の改革、天保の改革、ええじゃないか、ちょんまげ、体力ありそう、冬寒そう、相撲、寿司、侍、杉田玄白、勝海舟、寺子屋

多くのグループが、5分間で30程度の事柄を挙げることができていた。それらは、これまでに歴史の授業で学んだことや、マンガやドラマなどで取り上げられていて知ったことが多いようであった。グループでの活動とすることで、自分では思い浮かばなかったことに気付くことができたり、ある事柄に関連する出来事や人物名が連鎖的に挙げられたりするなどの効果があると言える。

② 十返舎一九と「東海道中膝栗毛」について知る

次に、第三展示室の「東海道中膝栗毛」の写真や国立国会図書館のデジタルコレクションを活用しながら、本作品が主に会話を通じて人物の言動の面白さを描く「滑稽本」というジャンルであることや、二十年間続いた当時のベストセラー作品であったことなどを説明した。

「東海道中膝栗毛」

作者:十返舎一九(1765~1831)

ジャンル: 滑稽本

江戸後期、特に文化・文政期(1804~1830)を中心に行われた小説の一種。江戸の町人の日常生活を取り上げ、主に会話を通じて人物の言動の滑稽さを描写した。

主人公2人の伊勢へと向かう、旅行記の形式をとる

Q 主人公二人は何者?

あるひと 或人問う、弥次郎兵衛、喜多ハは、もと原何者ぞや。こたへていわ答曰く何でもなし。弥次唯だの親仁なり、喜多ハこれも駿州江尻の産、すんじゅうえじり尻喰観音の地尻にて、さん しりくわいこんのん生れたる因縁によりてか、はなみずたらしろう旅役者、花水多羅四郎が弟子として、※静岡市清水区江尻出身串童となる。されど尻癖(=浮気癖)わるく、かげま尻すはらず(=落ち着かず)、しまい尻の仕廻は尻に帆をかけて、ふざけ弥次に随ひ出奔し(=逃げ出して行方をくらまし)、のみ供に戯気を尽す而已(=ばかり)。

「東海道中膝栗毛 発端」より

授業で使ったスライドの一部
※黒塗り部分は著作権上、掲載できない資料である。

【2時限目】江戸時代の「旅」についての理解を深める

この時間は、江戸時代の旅の様子が分かる様々な資料を提示しながら、「なぜ庶民も長距離の旅をする／できるようになったのか」を考えさせた。

① 江戸時代に庶民に旅が普及した理由を理解する

まず、第三展示室「旅への誘い」「道中」の解説パネルの内容や松尾芭蕉の「おくのほそ道」の冒頭部分を紹介しながら、江戸時代の人々が旅に対して憧れを持っていたことや、五街道などが整備され、人と物の移動が盛んになったことを説明した。

次に「街道絵図」の解説パネルの内容とともに、「東海道五十三次」「東海道名所図会」「東海道写真五

- ・江戸時代の庶民は、旅に対してあこがれを持っていた。その要因は主に二つある。一つ目は、道が整備されたことだ。五街道などができたことによって人々の移動が楽になり、徒歩でも長距離の移動が可能となった。二つ目の要因は各地の情報が絵図などから伝わるようになったことだ。これにより、寺社や地域ごとの景色や特産品などを目にした庶民が、それらを一目実際に見ようと旅に出るようになったのだと考えた。
- ・昔から庶民は旅にあこがれてきたが、寺社参詣という条件付きで楽しみとしての旅が盛んになった。一六〇一年徳川家康が交通整備を行ったり、五街道ができた。また、町人文化の発展や人々の生活水準が上がったことで余暇を楽しむ余裕ができた。そして御師が布教の一環で各地の珍しい話を聞かせたり、道中案内や浮世絵の広まりによって、各地の情報が伝わるようになった。これらの理由から、庶民も旅に出るようになった。

下線で示したように、「街道の整備によって人やモノの移動が盛んになったこと」「各地の情報が手に入るようになったこと」「生活水準の向上によって余暇ができたこと」「寺社参詣が許可されるようになったこと」など、生徒らは提示した資料の内容に触れつつ、自らの言葉で説明しようとしてできていた。

【3・4時限目】物語の舞台を捉える

3・4時限目は4・5人ずつのグループでの活動を中心にし、東海道がどのような場所であるのかを把握することと、「くずし字」に触れ、文字文化に関心を持たせることの二点を目的に、歌川広重の「東海道五十三次⁸⁾」を用いて授業を展開した。

① 「東海道五十三次」から宿場の名前を読み取る

各グループに歌川広重の「東海道五十三次」を印刷したものを配布し、各図絵に書かれた宿場名をAIくずし字認識アプリ「みを(miwo)⁹⁾」なども活用しながら読み取らせた。はじめてくずし字に触れる生徒がほとんどだったが、それぞれに協力し合い、楽しみながら活動に取り組むことができていた。

② 地図上の各宿場の位置にシールを貼る

歴博からデータ提供いただいた「秋岡武次郎古地図コレクションのうち 大日本道中細見記」【資料番号 H-110-1-129】を参考資料として印刷・配布し、それを参考に現在の地図上の各宿場の位置にシールを貼って東海道を可視化した。



「みを」も活用しながらくずし字を読み宿場の位置を確認していく



「大日本道中細見記」を見る生徒

⁸⁾ CANON の運営する無料印刷素材サイト「Creative Park」よりダウンロードしたものを利用した。

⁹⁾ スマートフォンやタブレット端末のカメラでくずし字資料を写真撮影し、認識ボタンを押すだけで現代文字に変換ができるアプリ。

③ 地図や図絵を見て、気付いたことや疑問点を共有する

次に、完成した地図や図絵を見て、気付いたことや疑問点をグループで話し合ったあと、各グループで挙げたことを全体で共有した。以下に、その一部を紹介する。

- ・平地に作られた宿場が多い。
- ・宮宿と桑名宿の間は湾を通っている。
→陸のほうが距離が短く見えるのになぜか？
- ・宿場の間隔が広いところと狭いところがある。
→狭いところの共通点として間に川があることが挙げられるが、雨で川が氾濫した際、足止めされるので川の両側に宿場が作られたのではないか。

生徒たちは、地図と図絵を比較しながら、宿場の立地や様子について考えを深めることができていた。特に三点目に挙げた宿場と川との位置関係に関する気付きと考察は、「東海道中膝栗毛」の作品中にも弥次郎兵衛と喜多八が雨で行く手を阻まれるという場面があることから、的を射たものであると言えるだろう。

下に、「学習の振り返り」のレポートで本時の学習について触れている生徒の記述を一部抜粋して紹介する（下線は報告者が加筆した）。

- ・私は授業内で日本地図に東海道中膝栗毛で主人公たちが行った宿場にシールを貼っていくということを行なった。私は宿場の大体の位置を特定するために、すべての宿場の名前を google map で検索を試みた。すると多少変化はあるが大体すべての宿場と同じ名前の街や駅が存在することがわかった。東海道中膝栗毛は 200 年も前に作られた物語のため宿場の名前も 200 年以上前につけられたものだ。その名前が今現在もつながり使われ続けているということを知った。東海道五十三次の宿場全てに広重が書いたその当時のその地の浮世絵がある。時がたち、その浮世絵とは違った街並みなどになった宿場もあるが、浮世絵で描かれた当時の風景と現在の風景がとても似ているものも多い。
- ・授業内で東海道五十三次の宿を全てマッピングするというワークを行った。この時、このワークから新幹線が東海道沿いに線路が作られていることに気づいた。この新幹線は東海道新幹線であり、一部区間を除いてほぼ東海道沿いに作られている。つまり、近世に作られた道が現在で主要な公共交通機関を作る基となっていて、それが現代人の生活の質の向上に関係している。

一つ目に挙げた生徒は、全ての宿場名を Googlemap で検索し、ストリートビュー機能などを利用して、宿場の名前や「東海道五十三次」に描かれた風景の趣が現在も残っていると実感できたことが伺える。二つ目に挙げた生徒の記述からは、宿場の位置と現在の地図を比較し、現在の東海道新幹線の線路は、当時の東海道とほぼ一致することを指摘し、近世に整備された交通網が現在も主要な公共交通機関のもととして、現在でも人々の移動を支えていると述べている。

これらの生徒の記述から、物語の舞台である東海道やその宿場の位置関係を掴むことができたと同時に、本単元の目標の一つであった「現代とのつながりを意識」することができたと言えるのではないだろうか。

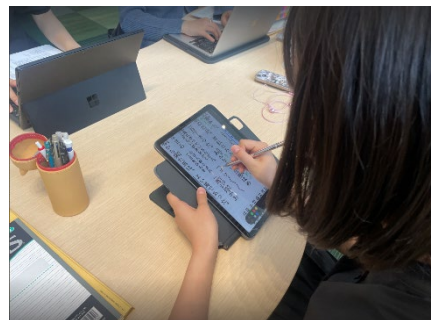
【6～9 時限目】「東海道中膝栗毛」の舞台を巡るガイドマップを作る

5 時限目では中等部で学んだ歴史的仮名遣いを確認する意図もあり、主人公二人が出発する場面を全員で読んだ。それを活かして 6～9 時限目では、『浮世道中膝栗毛』（品川一箱根）から『東海道中膝栗毛

七編下』(京都巡り)までの場面を、おおむね宿場ごとに一人一場面ずつ担当として割り振り¹⁰、自分の担当場面について紹介するガイドブックページを作成する活動を行った。成果物はA4サイズの画用紙1枚(横長)で作成し、必須項目として、担当箇所①担当箇所の名前、②あらすじ・要約、③解説、④その場所の現在の見どころ⑤参考文献を盛り込むこととした。

ガイドブック作成に至るまでの準備段階として6・7時限目では、自分の担当箇所のあらすじと、どのような点が「滑稽」なのかを書くワークシートを用意し、成果物でもその場面の「滑稽さ」が伝わるように意識させた。また内容の読解や情報収集の手助けとなるよう、司書教諭に協力を仰ぎ江戸時代や東海道に関連する書籍を30冊程度選書し、参考文献として生徒たちが学習中に自由に手にとれるようにした。

はじめは慣れない歴史的仮名遣いや言い回しに困惑していた生徒たちも、声に出して読んだり周囲の生徒と協力し合ったりしながら活動に取り組んでいた。中には、紙で渡したものをデータ化し、歴史的仮名遣いや口語訳を書き込みながら読む生徒もいた。下に生徒の作成したガイドブックの一部を紹介する。



担当箇所を読む生徒の様子

見付宿

「見どころPoint」

1. 弥次と喜多ハの掛け合い
↓
軽妙な会話に笑いを見よう。
二人のやりとりは、疲れた様子もコミカルに描写している。

2. 村の大変さも面白く描く
↓
旅の辛さや道の長さのイメージで、お互いを励まし合う姿がある。実際は大変でも、二人が仲良く進んでいる姿を描いている。

このシーンは村の大変さを描きつつ、それをユーモラスに表現している。

↓

こうした要素が組み合わさることによって、このシーン全体が面白くなる!!

「見付宿の現在」

見付宿が現在の現在の静岡県磐田市内には、歴史的な見所や観光スポットがある。

見付天神 矢倉は霊神社

縁結びや学問の神様として、知られている。

古くから地元が信仰を集めている。

境内の美しい景観や古い建物も見どころ!!

「この場面の概要」

主人公たちは、大久保宿を出発した後、思ったよりも早く見付宿に到着する。旅行の進行が予想以上にスムーズで、予定よりも早く宿に着いたことに驚きと喜びを感じている場面。

「弥次と喜多ハの会話」

弥次「ああ、くたばれた。」
喜多ハ「また、ひとりで疲れたよ。」
弥次「もう少しの辛抱だよ。頑張ろう。」
喜多ハ「それにしても、この道は思ったよりも長いな。」
弥次「確かに。でも、ここまで決まったらもう少しだ。」
「ちょっとここで一休みしよう。」
→ 二人が肩を下ろして休息。

喜多ハ「本当に疲れた。でも思ったよりも早くここまで来たな。」

S 大久保から見付へ

「参考文献」

<https://shizup/>
東海道宿場見物ガイド

wikipedia
見付宿

<https://streat.net.jp/>
東海道中膝栗毛とは。

¹⁰ 今回実践授業を行った2つの学習グループには、それぞれ20名、27名の生徒が在籍しており、計47名で分担した。

東海道中膝栗毛の作者、十辺舎一九が生まれた場所、

府中

〒420-0053 静岡県静岡市葵区弥次
安佐川餅 2-5



・日本遺産「徳川文化財」
・府中宿に古くから伝わる
名物!!
・「徳川家康」に由来

〒420-0868 静岡県静岡市葵区
宮崎町102-1
静岡市宮崎神社



〒420-0855 静岡県静岡市葵区
政府城公園1-1
土中櫓



- ・伝統的木造建築工法によって復元。
- ・各階の床板と天井板を全て取り外している。
- ・歴史資料館「火縄銃（ゴム銃）」で利用ができる。
- ・新館の一角にある代官屋敷には大政奉還後、海浜第一が商法会所を接収し、護国後の徳川、慶喜が21年間住んだ。

・国の重要文化財に指定
・徳川家康が元服（成人）した神社。



現在

あらすじ

先傳馬場に宿をかりて、それより弥次郎がしるべの方へたづね行。こゝに金子のさいかことのひ、あべ川へしけこまんと、きたハモるとも、したくをする。遊廊につくと何かさはがしく、ふすまをすこしあけて、となりざしきをのぞき見れば、あね女郎のこゝ夏が判刀をもつて、大ぜいの女郎がアリヤア性のわるいきやくひとりを中にとりまき、よつてかゝつてあたまをむしりちらかすと、さやく人、けんつうにて、みなつけがみれば、まげもびんもおちてしまいわはれる。さやく、もうてうじやハいかないとちかひ、女郎みなく、かくしたるかみをわたせば、是より中なをりの酒になる。弥次郎と北ハははらのかはをよじり、二人ながらひき分かれてまどるむ。

解説

しけこまん…遊廊などの患所へ入り込む。
アリヤア性…敵娼（お気に入りの遊女）を次々変える浮気な女。
丁子屋…当初はお茶屋、名物「どろろ汁」がらひ…静岡の方で「うい、かり」「す、かり」うかけ…女が帯をしめの上に掛けて着る長い小ぞで、開聲衆…仲間たち、友達、けんつう…髪を束ねた、少ないところ、弥次郎…野郎を嘲った借字。
「白天さまかけて」…天照皇太神宮さまかけて
…現代の言い方は「神様にちかて」

附録 付録について

武士のシンボル「髪」が結えないこと
「ハゲ」は恥であり、なんじか髪を結うための手段が附録だ。また、髪を結うときには左右の髪にボリムと長さが必要だ。髪に付録を用いたしただけで、髪にない髪で油で固定したかったため、少しの激しい動きがすたれた。

〒420-0852 静岡県静岡市葵区
新館町 徳川家康公屋敷跡 毎月様 新館町11-1



本文の要約

話は掛川宿の繁盛について所から初まる。繁盛にて、二つの堀井川で川に落ちたきた座頭の姿を見つけた北ハは、仕返しをたくらみます。
座頭は犬市と猿市と、二人とも目が見えません。北ハは、それを知り、彼らに飲めど酒を目の前で飲んでしまします。注げど注げどなる酒に犬市は猿市へ大句を言います。
しかし身に覚えのない猿市は店主へ大句を言います。
三三で子守が北ハを指を指し、事実を言、ため、北ハの悪事をバシバシとします。
結局、言いかれでできなかった北ハは64文（84両）をいそいで猿市とケンカし、さうなる所を弥次に止められ、犬市は繁盛をあらばやにします。

解説

まさか先ほび川に落ちた北ハは、前にも、自分たちの酒を飲まれているともしらる。
大方ありは、ごまの尻だつて、ごまかまたあそびで、まごつているのだらうとか悪口、とらふバカにしたような発言をして、彼らの姿が面白さをいふる言えす。

東海道中膝栗毛
西から東
沖井真井袋

「どまんなか」をうまく利用して観光資源にも地域のコミュニケーションにも活用中!

今と昔

昔 袋井は東海道中五十三次の27番目の宿場町で、中間地点に位置していました。東は掛川西は沼津と、大きな宿場町にはさまれ、本文のように休憩の地としてつかわれていた。

宿場の西側に位置する裏家は、基点に東海道と松並木、田園風景、宿場の家々が描かれている。袋井名産の餅もある。



今

現在の静岡県袋井市袋井。現在でもはるかなる昔世をモノにした繁盛があり、現在も地域の人たちの交流の場になっている。



現在でも「どまんなか」という名前のついた繁盛。他にも、ももまんなか通小中学校や言葉が袋井では、西どまんなか小学など、知っつかわれている。

加えて、生徒たちが「学習の振り返り」の「ガイドブックページの作成にあたり、担当箇所の読み取りや場面の説明などにおいて工夫した点」として書いたものを一部抜粋して紹介する（下線は報告者が加筆した）。

- ・（吉田）東海道五十三次の吉田宿の絵に描かれている吉田大橋（豊川橋）や吉田城などを知ることで、東海道五十三次で描かれている吉田は昔全国屈指の規模を誇っていた事などが分かった。これらを踏まえて、東海道中膝栗毛の吉田宿を読み取ることで喜多八と弥次郎兵衛がどのような場所でどのような事をしたのかを具体的に想像することが出来た。また、発表で吉田の歴史や吉田にある構造物を最初に話すことで、吉田がどのような街だったのかという印象を聴衆に与え、この物語がどんな場所でどのような事が起こったのかを具体的に連想させるよう促した。
- ・（袋井）私は、東海道中膝栗毛の掛川から袋井へ移動した場面を担当した。私が担当した場面は場所の特徴というよりその場で出会う人に特徴のある回だったので、場面の面白さだけでなく、ツアーガイドページということで、その場へ足を運んだ人が場所の特徴も捉えながら進めるように、場所に関する特徴を多く記述する工夫をした。例えば、袋井は東海道五十三次において、中心に位置する宿屋であり、「どまんなか」と称して多くの観光施設や地域コミュニティが作られていた。

一つ目に挙げた吉田宿を担当した生徒は、3・4時限目に使用した「東海道五十三次」の図絵を分析し、場面の舞台である吉田宿の様子がガイドブックページの読み手や他の生徒たちに、より具体的に伝わるよう意識して取り組んだことが伺える。二つ目に挙げた袋井宿を担当した生徒は、「ガイドブックページ」としての特色を活かすため、担当箇所である袋井宿が東海道の五十三の宿場の中心に位置することに着目し、宿場の場所や特徴に関する記述を多くするなどの工夫をしたことが伝わる。

5. 成果と課題

本実践は、近世の作品である「東海道中膝栗毛」の生まれた時代背景や舞台、本文の読解に博物館資料を活用することにより、過去から現在へと受け継がれてきた言語や文化への興味関心を高めようとする試みであり、物語中の各場面を紹介するガイドブックを作成する活動を軸に授業計画を組み立てた。

（1）成果

本単元は高等部3年間の学習指導計画において、古典作品の学習の入り口として位置付けた。現代の語彙に近い近世の作品を扱うことで、文語文法の習得に偏ることなく、当時の人々の生活や文化、考え方を知ることにより焦点を当てることができた。よって、中学校の古典に親しむ学習と文語文法の習得し古典作品の読解に重きを置く高校の選択科目である「古典探究」や「文学国語」との狭間にある必修科目「言語文化」の科目本来の目的を達成する教材として、「東海道中膝栗毛」は相応しいものと言えるだろう。つまり、「東海道中膝栗毛」の「言語文化」の教材としての有効性を示すことができた点が、本実践の成果の一つである。

生徒たちには実践終了後に、事後アンケートを行った。

【事後アンケート調査の概要】

- ・対象者：高等部1年学習グループ3・4に在籍する生徒40名¹¹
- ・回答率：85%（34名が回答）
- ・回答方法：formsによるオンラインでの回答

¹¹ 本単元終了後、7名が海外留学に出発しており、単元開始時よりも在籍者数が少なくなっている。

「様々な資料を活用したことは学習の手助けになりましたか？」という質問には、「なった」「ややなった」と答えた生徒が62%（21名）と過半数以上となり、「あまりならなかった」「ならなかった」という生徒は6%（2名）であった。学習の手助けに「なった」「ややなった」と答えた生徒に、その理由を尋ねたところ、下記のような回答があった（一部抜粋）。

- ・普段は見れないものを見ることができた。
- ・資料を使ったことでイメージがつきやすかった
- ・知らない知識の方が多かったので、詳細なことを知れたのはありがたかった
- ・出典が明記されている（博物館）ので、正確性が保証されていて、考察の時に根拠にしやすかった！

これらの回答から、博物館資料を用いたことで新たな知識を得ることができた点が学習の手助けになったと感じている生徒がいることが明らかになった。このことが本実践の成果の二つ目である。さらに4点目に挙げた生徒は、資料の正確さに触れている。博物館の資料が研究に基づいたものであり、「情報の信憑性」という点で信頼できるものとして活用することができたということだろう。

近世は庶民が文化を作った時代である。日本の歴史や文化を人々の生活の視点から展示している歴博の資料は、「東海道中膝栗毛」が一世を風靡した時代背景を理解するのに適していると言えるのではないだろうか。

本実践では、各生徒に担当箇所を振り分けることで個々に多様な学びが得られたことに加えて、成果物作成の過程で、自ら必要な資料を探し活用しようとする姿が見られた。これらの生徒たちの姿は近年高校教育の現場で関心が高まっている、教科を越えた探究活動にも繋がるものだろう。

（2）課題

次に、本実践において見えた課題について述べる。先述の事後アンケートで「本アサインメントを通して、博物館等の施設に対する意識に変化はありましたか？」と生徒に尋ねたところ、「あった」と答えた生徒は15%（5名）であり、「なかった」と答えた生徒が85%（29名）と大部分を占める結果となった。つまり、本実践では、博物館資料の活用には効果があったと感じる生徒はいるものの、多くの生徒の博物館に対する意識を変容させるまでには至らなかったということである。

博物館等の施設に対する認識に変化があったと答えた生徒に、具体的にどのような変化があったのかを尋ねたところ、3名から

- ・今までは只、色々なおそろくすごいものがたくさん置いてあるところだという認識だったが、学習をする上で便利な場所だと思った。
- ・変化があったというかさらに博物館への好感が上がりました。
- ・堅苦しい、到底理解ができないような事柄という認識だったが、少し触れることで理解できるような近しいものという認識が変わった。

という回答が得られた（上記は原文ママ）。博物館資料に触れたことで、博物館の持つものや情報学習への有効性を感じたり、以前よりも博物館を身近に感じたりすることができた生徒が少数でもいたことが分かったことは嬉しく思う。生徒たちが博物館をより身近なものに感じ、実際に自ら博物館に足を運んだり、様々なサービスを利用したりするようにするためには、継続的な取り組みやさらなる動機付けが必要であると感じさせられた。

6. さいごに

博学連携は、博物館の持つ良質で専門性の高い様々な資源を学校現場の教育活動に活かすだけでなく、生徒たちの博物館、広く言えば学問そのものに対する興味や関心を高めるという、学校と博物館の双方にメリットを生み出すことができるのが理想的な在り方だと考えている。そのためにはまず、博学連携の取り組みを多くの先生方に知ってもらうことが重要だろう。

生徒たちが様々な資料に触れることに楽しさや喜びを見出し、博物館に足を運ぶ機会が増えることを切に願うとともに、本実践が今後の国語科教科教育ならびに博学連携の一助となれば幸いである。

7. 参考文献

- ・安藤広重、佐々木守俊、町田市立国際版画美術館(著)(2010)『東海道五拾三次：保永堂版（謎解き浮世絵叢書）』二玄社
- ・伊馬春部(2014)『現代語訳 東海道中膝栗毛(上)』岩波現代文庫
- ・伊馬春部(2014)『現代語訳 東海道中膝栗毛(下)』岩波現代文庫
- ・大石学(監修)(2016)『現代語 抄訳で楽しむ 東海道中膝栗毛と続膝栗毛』KADOKAWA
- ・大石学(2021)『【ビジュアル版鑑賞ガイド】地形でわかる 東海道五十三次』朝日新聞出版
- ・十返舎一九、麻生幾次(1973)『東海道中膝栗毛 上』岩波文庫
- ・十返舎一九、麻生幾次(1973)『東海道中膝栗毛 下』岩波文庫
- ・藤澤紫(2021)「NHK 浮世絵 EDO—LIFE 東海道五拾三次 描かれた人々の「声」を聴く」NHK 出版
- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説【国語編】」
- ・文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【総則編】」
- ・文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【国語編】」
- ・キャノン「CreativePark『世界の名画を飾ろう』」<https://creativepark.canon/meiga/index.html>(最終閲覧日：2024年8月3日)
- ・国立歴史民俗博物館ホームページ <https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/>(最終閲覧日：2025年1月5日)
- ・横浜国道事務局「東海道への誘い」<https://www.ktr.mlit.go.jp/yokohama/tokaido/index.htm>(最終閲覧日：2024年8月4日)

【謝辞】

本実践を行うにあたり、国立歴史民俗博物館広報サービス室の皆様、博物館事業課資料係の皆様、博学連携研究員の先生方、ドルトン東京学園の田中天笙先生、関口真弓先生をはじめとするラーニングコモンのスタッフの皆様にお力添えをいただきました。また2025年1月25日に行われた「博学連携フォーラム 学校と歴博をつなぐ実践報告会」では、千葉県立市原八幡高等学校の飯塚薫先生をはじめ、参加者の皆様から貴重なご意見をいただくことができました。

末筆ながら、ご協力いただきました全ての皆様に厚く御礼申し上げます。